

「新たな公益活動の芽生えと今後の展望～震災後2年を前にして～」 来賓挨拶 内閣府特命担当大臣 稲田 朋美

ただ今御紹介いただきました、内閣府特命担当大臣の稲田朋美でございます。

本日は、内閣府主催のシンポジウムに多数の皆さん方に参加いただきまして、本当にありがとうございます。また、このすばらしいシンポジウムの開催を熱意をもって準備いただきました公益認定等委員会の池田委員長、そして、この後お話をいただきます曾野綾子先生、また、シンポジウムに参加いただきます皆様方に感謝いたしたいと思っております。



池田委員長には、私が就任いたしましたすぐに大臣室に来ていただきまして、公益法人の取組や、また、新公益法人制度への移行審査を行う委員会の様子などいろいろお話をいただき、また、委員会も視察させていただきました。本当にすばらしいなど、また、今お話しいただいたように、そのお志と姿勢に全く私も共鳴いたしたところでございます。

また、私はいつも産経新聞で曾野綾子先生の文章を読ませていただいております。最近では、あの体罰の問題、いじめの問題、またアルジェリアの人質の問題などで、近視眼的ではなくて、固定概念にとらわれない、非常に斬新な切り口の文章にいつも感動というか、勉強させていただいているところでございます。

先ほど委員長からもございましたが、公益法人の皆様方には、今回の東日本大震災の復旧・復興に大変御尽力いただいていることに、私も本当に感謝いたしております。今回の震災でも、また、阪神・淡路大震災のときも、被災地における私たち日本人の行動が世界から称賛されています。今回の震災でも、戦後に教育を受けたはずの若い役場の女性が、津波が来たから逃げてくださと言いながら、御自身は津波にのまれて亡くなられたという話がございまして。

また、今、安倍総理に外交のアドバイスもされている元外務事務次官の谷内正太郎さんから聞いた話では、被災地の9歳の男の子が、寒さにふるえて、半ズボンと半袖シャツでいたところ、ベトナム人の記者が寒いでしょうと言ってジャンパーをかけたら、そこからバナナ、が落ち

た。そこで、おなかが減っているのだったら、そのバナナを食べたらどうと渡したら、その男の子は実は津波で両親を亡くしている子どもなのですけれども、自分はおなかが減っているにもかかわらず、食べないで、避難所の食料を置いておきに行つたということです。その姿を見て、こんな少年はベトナムにはいないと言って、本国に帰ってそのことを新聞で書いたら、たくさんの義援金が集まった。その一部は、バナナの少年に渡してくださいと書いてあったというお話でありました。

私はその話を聞いたときに、いつも安倍総理が講演でされる話を思い出しました。戦後の占領下で、靴磨きの少年がいた。その少年に連合軍の日系人の人が、お腹が減っているだろうと言って、その少年にパンを持っていったら、少年は食べずに、それをお道具箱にしまった。どうして食べないのと聞いたら、自分は戦争で両親を亡くしたけれども、まだ3歳になる妹が家で待っているの、その妹と一緒に食べたいから持って帰りますと少年が言うのを聞いて、その日系人の人が、絶対日本は大丈夫だと感じ、自分が日系人であることに誇りを感じたという話です。そして、その方は、日系人で初めてハワイの州知事になられたそうであります。

そういう話を聞くと、やはり日本人のDNAというのはすばらしいと感じます。私は、やはり日本という国は、単に経済大国としてだけでなく、道義大国として世界中から尊敬される国を目指すべきだし、そう目指すことができる国民性を有していると思っております。

先ほど池田委員長から、「三方良し」という話がありました。まさしく強欲資本主義、自分たちさえ儲かればよいという強欲資本主義ではなくて、日本型の資本主義が世界に広がっていくことが必要なのではないかと私は思っております。

私は、大臣として様々な分野を担当しておりまして、クールジャパンもその担当分野の一つですが、何がクールか、何が格好いいかという、そういう日本人の生き方そのものがクールなのではないかと思っております。そういうことも、アニメやコンテンツもいですが、世界に広めていきたいと思っております。

そういう意味におきまして、皆さん方の活動は本当にすばらしいものだと思いますし、私もこれから公益法人の活動を精いっぱい支援してまいりたいと思っております。本日のシンポジウムが実りあるものであることを祈念いたしまして、私の挨拶に代えさせていただきます。

本日はどうもありがとうございます。